

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第150号 会報 1995年11月15日

目次

| | | | |
|-------------------------------------|---|--|----|
| 第98回総会・講演会報告 | 1 | 学会初期の頃のこと | 8 |
| 会長挨拶 | 2 | サイエンス・ボランティア募集について | 10 |
| 第183回運営委員会報告 | 3 | 訃報(前田憲一名誉会員) | 11 |
| 第1回(平成7年度)大林奨励賞の候補者 推薦のお願い | 4 | 研究助成金案内 | 12 |
| 合同誌ワーキンググループ発足の経緯と 役割 | 5 | メーリングリスト「GRAPE」のご案内 | 12 |
| 合同誌創出について(投稿) | 7 | SGEPSS Calendar | 13 |
| 新入会員 | 7 | 第99回総会並びに講演会開催のお知らせ (第7回地球惑星科学関連合同大会) | 14 |

第98回総会・講演会報告

第98回地球電磁気・地球惑星圏学会総会・講演会は1995年10月18日(火)より21日(金)の四日間、京都大学工学部のお世話で京都北文化会館において開催された。会場となった京都北文化会館はこけら落としを済ませたばかりの美しい建物で、北大路タウンというショッピングモールの一部にあるという、最近の学会のなかでは最も洒落た雰囲気の中の学会となった。また、交通も地下鉄北大路駅から至近距離という至極便利なところにあり、学会の前後や合間に古都の秋を楽しむためにも絶好のロケーションであった。

会期は天候にも恵まれ、気持ちの良い気候の中で300近い講演がおこなわれた。本学会の国際学術交流事業補助金(招聘)で台湾中央研究院地球科学

研究所の洪崇勝博士が参加され、岩石磁気・古地磁気のセッションで発表された。今回の学会でも昨春秋に導入した、(1) セッションの日割りを講演申込案内の時点で公表した、(2) 会期を4日間とした、(3) 講演時間を12分とした、などの新機軸を引き続き試みた。

総会は、議長として指名を受けた大志万運営委員によって次ページのように議事の進行がはかられた。議事としては、地球惑星科学分野合同の新欧文誌についてと科研費問題についてが挙げられて、活発な意見の交換が行われた。次期講演会(合同学会)については準備状況が渋谷運営委員より報告された。次々期開催地に関しては通信総合研究所でお世話頂くよう乙藤会員より提案があり、快諾された。



合同大会の予稿申込は固有セッションについては裏表紙を共通セッションについては同封の連絡会ニュースをご参照ください。

第98回総会式次第

- | | | | |
|----------------|-----------|----------|----------------------------------|
| 1. 開会の辞 | (白井英之会員) | 10. 議事 | 地球惑星科学分野合同の新欧文誌について 科研費問題について |
| 2. 総会議長指名 | | | 次期開催地 (渋谷運営委員) |
| 3. 大会委員長挨拶 | (木村大会委員長) | | 次々期開催地 (乙藤会員) |
| 6. 会長挨拶 | (國分会長) | 11. 謝辞 | (鶴田評議員) |
| 7. 運営委員会報告 | (湯元運営委員) | 12. 閉会の辞 | |
| 8. 大林賞の作業委員会報告 | (森岡運営委員) | | |
| 9. JGG編集委員会報告 | (福西編集委員) | | |

会長挨拶

会長 國分 征

第98回地球電磁気・地球惑星圏学会総会に当たり、一言ご挨拶申し上げます。この度は、京都大学工学部のお世話より開催されることになり、初秋の京都において快適は環境で講演会・総会を持つことができました。準備に当たられた木村大会委員長以下、京都大学の会員の皆様に会員を代表して感謝の意を表したいと思えます。

現在学会として解決しなければならない課題をいくつか抱えておりますが、学会活動はますます発展していることは、講演数に現れています。今回の講演数は、口頭発表194、ポスター103となり、実質3日半の会期で目いっぱい状況になっております。講演数は増加の傾向にあります。学会の会期が4日では長すぎるという意見もあるようですが、現状の3セッションの方式では、4日間を会期とせざるを得ない状況はご理解願えるかと思えます。これまで何回か会期については議論がりましたが、今後の講演数の推移によってはセッション数を増やすことを含めて検討しなければならない状況も予想されます。

次に実務的なこととなりますが、二つのことについて申し上げたいと思えます。

1) 大林奨励賞について

大林奨励賞については、前期大家会長、運営委員等のご努力により賞の制定が決まり、新たに発足することになりました。運営委員会としては、森岡会員を委員長とする作業委員会を作り、第一回目の受賞者の選定に向けて作業を開始しました。先の学会の際、第一回目の受賞は、できれば来春の学会の際に行い、来年度には秋にも受賞者を決め、春には田中館賞、秋の学会では大林奨励賞という形で今後の受賞を進めると申し上げました。しかしながら、推薦作業委員会で検討した結果、この案で第一回の受賞

者を決定することが日程的にも困難であるとの結論に達し、来春の授与は見合わせることで選考を進めることになりました。推薦の締め切りや手続きなどについては会報にてお知らせすることになりますが、会員各位からの推薦をよろしくお願いいたします。

2) JGG誌について

JGG誌については、1993年3月にJGG将来検討委員会が設けられ、JGGの現状、財政基盤の問題、JGGの将来に向けての方策等さまざまな角度から検討されてきました。これらの検討の結果、検討委員会は、JGGを日本の地球物理学英文中核誌とする方向を目指すべきとの決論に達し、学会長に宛て答申が提出されました。これを受け、大家前会長より関連各学会（惑星科学会、地震学会、火山学会および測地学会）に対して、JGGを英文中核誌とする提案がなされ、昨年9月までに各学会からの回答が寄せられております（会報139、141、144および146号に関連報告が掲載されている）。各学会からの回答については、大家前会長の報告にも述べられているように、それぞれの学会の状況を反映し、本学会からの呼びかけに対して必ずしも具体的な点で一致した回答を得てはおりません。この呼びかけで明らかになったことは、関連学会の合同欧文誌を持つべきであるという考えは共通の認識として存在することです。

今期の運営委員会では、これまでの経緯を受け今後の進め方について議論を重ねてきました。本学会から最初の呼びかけをしたことを考慮すると、次のステップのためには本学会から何らかの働きかけをすべきことは当然のことであり、このため運営委員会の中に合同誌ワーキンググループを作り対処することになりました。しかしながら、具体的な方策を提案するには機が熟してはいないとの判断のもと、会長判断で非公式な意見の交換の場を持つことを

ワーキンググループに諮り、他学会関係者との意見を交換することができました。これらを通じて合同学会誌の具体的な検討を開始する時期に達しているとの認識を持つことができ、9月5日付で、地震学会、火山学会、惑星科学会および測地学会会長宛てに、「合同欧文誌に向けての作業委員会」の発足を呼びかける提案を致しました（追記；地震学会、火山学会、惑星科学会からは返答を得ている）。

作業委員会の具体的な検討事項としては、合同誌の性格についての議論、財政的基盤、配布方式、編集体制、編集方式等に関する検討等、合同誌発足に向けての基礎となる実行案の作成を提案。

この提案に対する賛同が得られれば、本年中には作業委員会が発足することになると考えられます。な

お、この問題は、学会の活動に関わる重要課題であり、本日の総会の討議事項としてありますので、会員各位の忌憚のないご意見・批判をお願いしたい。

合同誌の問題に関連して、参考までに European Geophysical Society の「Annales Geophysicae」誌について、紹介しておきたいと思います。この学術誌は、Annales de Geophysique と Annali di Geofisica を継承し、学会誌として1983年に創刊されたもので、現在では、JGR誌と引用の数では勝るとも劣らないまでになっているといわれています。今後の本学会や関連学会の発展のためにも、このような例を参考にして検討を重ね、新しい形の合同誌が実現することを期待しています。

第183回運営委員会報告

日時：平成7年10月4日（水）17:00-21:00

場所：京都市北文化会館 1階第4会議室

各担当委員から以下の諸報告がなされた。

1. 旧ソ連支援のJGG無償配布について、テラ学術図書出版のご厚意により1995年1月号から10機関に無償配布を開始することになった。（総務）
2. 学会員名簿作成費（35万円／年）を準備する必要あり。（会計）
3. 会報の発行について、150号の原稿を11月中旬締め切りとしたい。（庶務）
4. 次期合同学会の準備について（春期大会担当）
 - ・固有セッションのプログラム編成のために原稿締め切りを1月8日としたい。
 - ・超高層分野のプログラム編成を大村、小野、固体分野を兵頭、渋谷委員が担当。
5. 合同学会連絡会報告（連絡会幹事、渉外担当）
 - ・参加学会は第四紀学会を含め13学会になった。
 - ・95春の合同大会の分担金はプログラム送料分の10.5万円のみ。
 - ・次回の開催地は名古屋大学の可能性が大きい。
 - ・事務局設置については現在、何処に置かか決着がつかっていない。
6. JGG編集員会報告（雑誌担当）
 - ・今年度はJGG奨励賞の候補者の推薦は無し。
 - ・11月1日の編集委員会で次期編集委員を推薦する。
 - ・JGG将来計画について、会長から日本火山、日本測地、地震、日本惑星科学会宛に合同誌へ向けての作業委員会の設立の提案の呼びかけがなされた。
7. 次期の学会誌編集委員長推薦委員会については会

長が近々中に3名を指名する。

8. その他

- ・山田科学振興財団の研究援助候補推薦依頼の件は会報で周知する。
- 前回の議事録が承認された後、以下の議事について審議され、承認された。
1. 新入の会員が承認された。
 - ・会員の連絡先不明者について各運営委員が連絡を取り、整理する。
 2. 学校科目「地学」関連学会間連絡協議会（仮称）への参画の承認と委員の選出が行われた。
 - ・三浦委員を担当に選出し、11月13日の会議に参加する。
 3. JGG誌の海外会員の値上げ時期が決定された。
 - ・第96回総会で承認された海外会員の会費値上げ（\$40→¥6000）に伴うJGG誌購読料の値上げを1996年1月号から実施する。
 4. SGEPS学会講演会海外参加候補者（1件）の審査が行われた。
 - ・Hornig, Chorn-Sherm (Inst. of Earth Sci., Taiwan)氏の第98回学会への招聘が承認された。
 - ・事務手続き上、次回から応募締め切りを5月末に変更することを会報等で周知する。
 5. 国際学術研究集会出席補助金申請書（3件）の審査が行われた。
 - ・若手の会員を広く援助することを考慮して、上田裕子（千葉大学工学部）会員を秋のAGUに派遣することを決定した。
 6. 合同誌作業委員会にむけての審議がなされた。
 - ・WGから出された合同誌についてのこれまでの経過および今後についての説明文を一部修正後、運営委員

会として学会期間中に配布し、総会で議論し、意見をくみ上げることを承認した。

7. 大林賞の作業委員会報告と運用方法について了承された。
 - ・森岡作業委員長から出された、作業委員会での内規の確認、調査・推薦方法、今後のスケジュール等について承認がなされた。
 - ・平成7年度の受賞者を平成8年の秋に表彰することが決定された。
 - ・次号の会報で会員からの推薦を広報し、公募(12月末締め切り)することになった。
 - ・推薦の送付先は作業委員長とする事になった。
8. 長谷川・永田賞受賞候補者選考委員会について審議された。
 - ・全運営委員の構成の受賞候補者選考委員会をつくることになった。
9. 第98回総会審議事項について検討された。
 - ・科研費問題と対策について総会の議題とすることになった。

- ・議長に大志万委員を選出した。
 - ・総会式次第について検討を行った。
 - ・次々開催地として、通信総合研究所の可能性を打診する事になった。
 - ・特別講演の司会に森岡会員を選出した。
10. その他
 - ・1996年7月23-27日(Brisbane, Australia)開催のWestern Pacific Geophysics Meetingの共催を承認した。
 - ・1996年秋東京で開催のChapman Conference「The Earth's Magnetotail; New Perspectives」の共催を承認した。
 - ・1998年7月名古屋での第32回宇宙空間科学コスパー総会の共同主催を承認した。
 - ・海洋調査技術学会の研究成果発表会の協賛を承認した。
 - ・AGUから会長宛にe-mailによる情報交換の依頼があったことの報告があった。(会長)
 - ・田中館賞の「館」について調査する事になった。
 11. 次回運営委員会を、平成8年1月頃、国立極地研究所にて開催する。

(総務担当運営委員)

第1回(平成7年度)大林奨励賞の候補者推薦のお願い

大林奨励賞候補者推薦作業委員会

第1回(平成7年度)大林奨励賞につきまして、下記により会員からの候補者推薦をお願いいたします。

記

1. 候補者の対象 大林奨励賞内規第1条に該当する本学会会員
2. 推薦者 本学会会員(及び大林奨励賞候補者推薦作業委員会委員)
3. 推薦締切期日 平成8年1月10日(水)必着
4. 推薦手続 以下の(1)から(8)の項目を記載した推薦書を1部送付(郵送)して下さい。

- (1) 推薦者氏名(自署・印)
- (2) 候補者氏名, 生年月日
- (3) 候補者所属機関・部局・職
- (4) 学位論文名
- (5) 学位取得年
- (6) 審査対象論文名(3編以内, コピー各1部添付)
- (7) 審査対象論文に対する評価(それぞれの論文について400字以内)

- (8) 候補者の研究が学会, 研究分野に果たす貢献, 及び候補者の研究の発展性(400字以内)

5. 推薦書送付先

森岡 昭
仙台市青葉区荒巻字青葉
東北大学理学部超高層物理学研究施設
e-mail morioka@stpp.geophys.tohoku.ac.jp
TEL 022-217-6735(直通)
FAX 022-217-6406

参考 大林奨励賞内規 第1条

本学会に大林奨励賞を設け、以下の(1)(2)項の対象となる会員を表彰し、その研究を奨励する。

- (1) 本学会若手会員の中、地球電磁気、超高層物理学、及び地球惑星圏科学において、独創的な成果を出し、さらに将来における発展が充分期待できる研究を熱意をもって推進している者。
- (2) この場合、若手会員とは当該年度初めに、原則として35才以下の会員をいう。

合同誌ワーキンググループ発足の経緯と役割

SGEPSS では JGG の将来問題に端を発し、欧文誌の問題が数年間にわたって議論されてきました [例えば、会報 139 号 15 頁; 142 号 4 頁; 146 号 7, 9 頁; 148 号 7 頁; 149 号 5 頁]。その結果、地球惑星科学分野を包括した欧文誌が必要であるとの声が高まり、欧文誌の問題は SGEPSS のみではなく、他の地球惑星科学関連の学会の問題でもあるとの認識が出てきました。そこで、他の学会と一緒に考え、問題を解決していくために今年 6 月の運営委員会での他の学会と一緒に合同誌ワーキンググループをつくることを決定し、日本火山学会、地震学会、日本測地学会、日本惑星科学会の 4 学会にワーキンググループを作ること呼びかけました。また、SGEPSS から運営委員 3 人と編集委員 2 人のメンバーを選出しました。

このワーキンググループでは合同誌の性格、財政的な基盤や配布形態、編集方式、既存欧文誌 (主に JGG と JPE) の継承形態、合同誌名等の、SGEPSS が単独で議論できないことが検討される予定です。しかし、SGEPSS 側のワーキンググループはまだできたばかりで、SGEPSS 側としてどういう具体案を提出するかということは全く話し合われていません。従って、これから会員の皆様の意見を聞きながら、また他の学会と話し合いながら合同誌の具体案を作成していくことになると考えられます。その後、この案を SGEPSS へ持ち帰り総会等で検討した後、最終的に皆様の賛否を問う形になるかと考えられます。

以下に何人かのメンバーが欧文誌の問題について考えていることを簡単にまとめます。

小野：

我々の手に JGR のような地球物理学の総合誌を持つことの魅力は、私も十分に感じているところです。しかしここでその魅力にとりつかれたまま、JGG から合同誌への移行へとただひたすらに突き進んで行く事には反対です。JGG の現状における問題点とその解決についての努力は続ける必要があると思いますし、合同誌への移行が持つ問題点についても冷静な整理・分析が必要だと思えます。

JGG が合同誌に移行する場合どのような形態で引き継がれるのかはまだ決まっていませんが、合同誌は任意購読性の形態となる事が予想されます。もし参加学会員全員が購読するのであれば経済的な問題点はほぼ解決するでしょう。しかし任意の購読と

合同誌ワーキンググループ

なった場合、1 人あたりの負担増は覚悟しなければなりません。私が危惧するのは、このときもし JGG に競争力が備わっていない場合、購読数の減少ひいては JGG の衰退は防ぎようが無くなってしまいう点です。この時点ではもう取り返しはつきません。

主張したいのは、JGG が充分な力をつけた上で合同誌に参加できるよう、合同誌移行問題は慎重に進めるべきだということです。JGG の問題に目をつぶって合同誌に幻想を求めているばかりでは、現在の JGG を維持することさえできなくなってしまうことが最も心配されます。

JGG の現状には幾つかの問題があることは周知の通りだと思いますが、JGG には現在でもかなりの論文の投稿件数があります。これは SGEPSS 会員の研究活動の活性化によるもので、今後投稿件数はますます増加するものと期待できます。但し、これらの成果の発表の場として、JGG がしっかりとしていなければなりません。学会の支援を受けて研究の補助を得、講演会で発表やディスカッションを経て練り上げた研究成果が、いざ発表の段階で行き場を失うようなことがあってはならないと思います。

JGG の多くの問題の解決策は、国際的なサーキュレーションを良くすることにつきますが、優れた研究成果の発表が素直に JGG 誌へ向かえるよう、我々が努力することがまず第一歩だと考えます。それには論文の研究分野が誌名と整合するよう、JGG の誌名をもう一度見直して頂きたいと思っています。幸い合同誌そのものの否定するする会員はいないように見受けられますので、JGG 誌名を変更することには反対は出ないのではないのでしょうか。

福西：

今、世界は大きな転換点に直面していると思います。21 世紀を目前にして地球環境問題の解決を避けて通ることはできません。地球科学の諸分野は、その誕生の時からグローバルな見方をしてきました。現在、私たち研究者に求められているものは、個別の学会という狭い枠にとらわれずに、学会を越えた共同研究を積極的に進める努力ではないのでしょうか。地球や惑星を相手にしているのに、各学会ごとに学会誌をもっている現状は、国際的にみればとても分かりにくく、研究成果を世界にできるだけ速く発信する点において大きなマイナスになっていま

す。科学の面において日本が国際的役割を十分に果たすためには、まず合同誌を早期に作り上げることが必要です。JGGが科研費研究成果公開促進費の特定欧文誌に採択されているのは、当然のことですが、SGEPSS だけのためだけでなく、広く地球科学の分野の研究成果を世界に発信するためです。SGEPSS の会員がこの点を十分に認識され、合同誌の問題を自分自身の問題としてとらえ、新たな一歩を踏み出されることを期待しています。私自身そのために最大限の努力をしたいと思っています。

山本:

合同誌の理念は除いた、現実的な問題点だけについて私の理解している所の要点は以下の通りである。

1. JGGの「質・量・配布」等は、現状のままで良いとするならば、現在の体制で続けられる。発展を望むなら、新しい事(例えば合同誌)を考える必要がある。

2. 現状のままで「仮に」良いとしても、財政的な面で、非常に近い将来、購読制等の改革が必要となる。その場合、配布量を確保出来るかは非常に疑問であ

り、つぶれるという可能性あり。

3. 合同誌の形態に発展させた場合にも、上記の問題が解決するかは、他の学会の事情が絡むため、SGEPSS だけで議論しても先には進まない。

従って、「理念的な動機がある・なし」に関わらず、雑誌(JGGであろうと合同誌であろうと)を続けていくには、何らかの改革が必要である。その一つの可能性として「合同誌」を考えるのであれば、他の学会と合わせて具体的な検討が急務である。

横山:

地球科学分野は現在統合の時期に来ており、地球科学という視点からの学問の発展を促すためにも合同誌は必要と考えられます。合同誌を成立させるには様々な難問をクリアしなければなりません。合同誌が必要だという理念を確立できれば、後は技術的なこととして解決策を模索していくことができると信じます。

会員の皆様にはまず合同誌の必要性について議論いただければと思っております。

ワーキンググループメンバーの連絡先は下記の通りです。どうぞ、皆様のご意見をお寄せください。

| | 所属 | FAX | Email |
|--------|-----------|--------------|---------------------------------|
| 小野 高幸 | 東北大学理学部 | 022-217-6517 | ono@stpp1.geophys.tohoku.ac.jp |
| 福西 浩 | 東北大学理学部 | 022-217-6739 | fuku@stpp2.geophys.tohoku.ac.jp |
| 本蔵 義守 | 東京工業大学理学部 | 03-5499-4093 | yhonkura@geo.titech.ac.jp |
| 山本 達人 | 宇宙科学研究所 | 0427-59-4236 | yamamoto@gtl.isas.ac.jp |
| 横山 由紀子 | 職業能力開発大学校 | 0427-63-9186 | yokoyama@uitec.ac.jp |

また、超高層電波研究センターの大村委員のお世話で雑誌関係の意見を述べるためのメールグループ jgg@kurasc.kyoto-u.ac.jp ができましたので、こちらもどうぞご利用下さい。以下はそのマニュアルです。

- *メールグループに加わりたい人は、jgg-request@kurasc.kyoto-u.ac.jp にメールを送ると、登録されます。
- *メールグループから脱退したい場合には、同じく jgg-request@kurasc.kyoto-u.ac.jp に、Subject欄に "unsubscribe, signoff, delete, erase" の内のいずれかを記入してメールを送信すると、脱退できます。
- *メールグループのメンバーリストが欲しい人は、jgg-request@kurasc.kyoto-u.ac.jp に、Subject欄に "list" と記入してメールを送信すると、メールグループのリストが送られてきます。
- *メールグループにこれまでポストされた全てのメッセージが欲しい人は、jgg-request@kurasc.kyoto-u.ac.jp に、Subject欄に "log" と記入してメールを送信すると、全てのメッセージ送られてきます。
- *このマニュアルが欲しい人は、jgg-request@kurasc.kyoto-u.ac.jp に、Subject欄に "help" と記入してメールをすると、このメッセージが送られてきます。

以上のリクエストに対する処理は、1時間以内に実行されます。

合同誌創出について(投稿)

地球惑星科学に関連した分野を広くカバーする新しい合同英文誌を作ろうとする動きがこの数年続いています。先の秋季大会では、この問題に関して重要な議論(というより意見の表明)が行われました。しかし、私は議論の全体的な雰囲気はかなり失望してしまいました。総会の後、合同誌のワーキンググループに私の感想を伝えましたところ、会報に投稿してみたらどうかとある委員から勧められました。自分なりに問題を整理する努力もしてみましたので、以下の2つの点について意見を述べます。

1)情報の開示: 先の総会では、「合同誌」に対する典型的な賛成意見と反対意見がそれぞれの立場を代表するような形で述べられました。また、「一般会員」からも議論の方向に対する鋭い発言がされました。その時私が強く感じたことは、一般会員と事に当たっている(いた)人達との間では、持っている情報量に非常に大きな差があり、そのことがいたずらに不安・不審を招く原因になっているのではないかとことです。私たちが知りたいのは、具体的根拠に基づかない悲観論や楽観論で脚色された仮想的未来ではなく、具体的な数字や学会間の了解事項などに基づく現実的な将来像です。議論は非常にクリティカルになってきていますから、憶測の入る余地のないよう、より詳しい情報開示を委員などの立場の方々にはぜひお願いしたいと思います。そのためには、電子メールやWWWの積極的利用が必要なのではないのでしょうか。

2) なんのための合同誌か: 私は、日本の地球科学(旧来の地球物理学の範疇だけでなく、多圏地球、惑星、さらに惑星間空間も対象とした広い意味での)の健全な発展のためには、JGG的な雑誌の存在が不可欠だと考えており、その立場から発言しています。私は合同誌の問題は「合同大会」と深い関係にあると考えています。より正確にいいますと、合同誌は合同大会とではなく「学会連合」と表裏一体をなしていると思っています。合同大会はあくまでも暫定的な場であり、より恒久的な交流の場は学会連合によって実現されなければなりません。合同大会が始められた時のことを思い出してください。非常に多くの人達が、既存の学会があまりに細分化されているため(細分化の理由にもはや大多数の会員が関知していない現実があるにもかかわらず)、地球や惑星という大きな広がりをもった研究対象への素直なアプローチが妨げられているし、将来の健全な発展も阻害されているのではないかと切実に考えたからこそ、合同大会が実現したのではないのでしょうか。少なくとも私

の意識のなかでは、合同誌はそのときから学会連合とはほぼ同義語的に存在していました。

私の一番言いたいことは、合同誌問題は決してJGG問題ではないということです。もちろん、合同誌を実現するために、現実的に利用可能な最大の資産としてJGGが存在しています。また、そのJGGには編集委員会が分析してみせたように、かなり深刻な問題があることも事実だと思います。しかし、多少青臭い言い方かもしれませんが、なぜいま新しい雑誌を創出しなければならないのかという議論が深められることなしに、技術的・財政的な面ばかりが議論のなかで強調されると、私には単に学会エゴだけが振り回されているようにしか感じられません。学会は会員の現在の利益を守ることも必要でしょうが、同時に科学の将来に対しても大きな責任があるのではないのでしょうか。私は、地球科学の「将来」と「理想」を語るこそが合同誌を考える上でいま必要なことのような気がしてなりません。

鳥居雅之会員(京大地球惑星)

新入会員

春の総会以降に本学会に入会された方は以下のとおりです。

正会員(学生)

| | |
|------|---------------|
| 坂田圭司 | 東海大学大学院工学研究科 |
| 後藤忠徳 | 京都大学大学院理学研究科 |
| 木村尚紀 | 東京大学地震研究所 |
| 石田東嗣 | 名古屋大学大学院理学研究科 |

海外会員

F. Robach CEA/CENG, France

以上の新入会員の加入により10月4日現在、正会員584名、正会員(学生)80名、海外会員62名、名誉会員4名、賛助会員15社となります。

国際交流事業募集

当学会では国際交流事業として、●地球電磁気・地球惑星圏学会講演会への海外参加候補者、●国際学術研究集会への出席補助金受領候補者の募集をおこなっています。応募には、所定の申請書類(学会事務センター備付)を本学会運営委員会に提出して下さい。補助金受領者の選考・義務等については学会基金による国際学術交流事業運用規定(会報132号参照)をご参照下さい。

学会初期の頃のこと

前田 担

1945年の敗戦当時、私は京都師範学校の教員であった。戦争中は動員令とやらで工場で働かされ、ろくに勉強もできなかったので、当時の二・三人の友人と「もう一度勉強し直そう」ということになった。幸いマッカーサーの指示で、旧制高等学校卒業でなくても帝国大学への入学が可能となり、知人の紹介で地球物理の長谷川万吉先生を訪ねた。

ちょうど冬の頃で、教授室へ入ると先生は火鉢でイモを焼いておられ、厳しい食料難の時代ではあったが、帝国大学の教授は余裕があるなあと感心させられた。このような因縁で、入学後は長谷川研究室へ入門する羽目になった。その頃は優秀な人が多く研究活動も活発であったが、ワイ談も活発で、あるとき学部学生から「度が過ぎる」と叱られた。

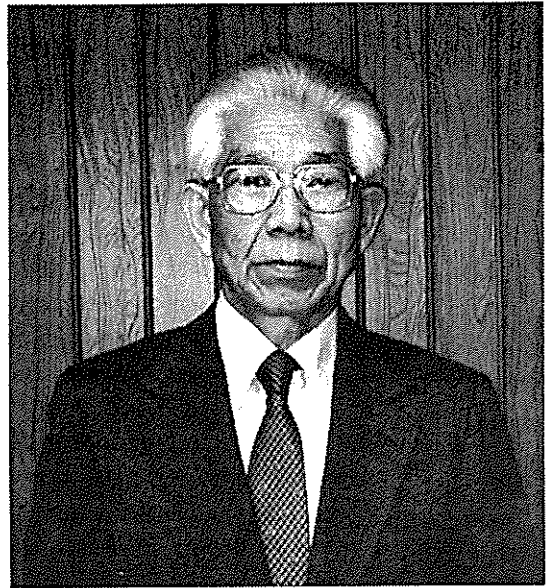
当学会がつくられたのは1947年で、私が学部に入學したての青二才の頃だから、創立当初のいきさつは知る由もない。初めて出席したのは第2回京大での年会で、公演したのは第8回東大での年会であった。その頃はまだ連合軍の占領下にあり、講演者は欧文アブストラクトをGHQに提出しなければならなかった。このことは、ぎりぎりまで仕事に追われているものにとっては大きい負担であった。

またその頃は、スライドなどというハイテクはなく、紙のビラに手書きということで、宿舎に着いてからビラ書きや、アブストラクト作りに多忙を極めることが多かった。

一番おどろいたことは、第二次大戦後アメリカ軍がドイツから持ち帰ったV2ロケットで超高層の観測をし、その結果を、たまたま京都に来られたロンドン大学のMassey教授に見せてもらった時のことである。

その頃、私は電離層電気伝導度の計算をしており、電子密度の垂直分布が必要であったが、Chapmanの理論と電波による観測の結果からでは構造を決めかねていた。そこへロケットによる直接観測の結果を見せられ、それにとびついたものである。ところがその後の観測によって、分布の仕方は日によっていろいろと変わることがわかり、少々がっかりした。しかしその後、ロケットから人工衛星、さらに惑星探査機による観測が相次ぎ、私の在職中の30年間はスペースサイエンスの全盛期にめぐまれた。

次の思い出はIGYで、長谷川研究室では戦前から第2回国際極年のデータを集め、精力的に解析が進められていたようで、戦後再開されたところへ入



門したため、ごく自然にデータ解析に従事することになった。あるとき長谷川先生が、「IGYデータセンターの地磁気部門を京大で引き受けても協力してくれるか」と言われ、今までの実績もあるので協力しようということになった。

IGY後期から続々とデータが送られてくるが、場所も人手もないので、遂に大学図書館内に一室を借りて、細々と開業することになった。しかし一人の職員では対応し切れないのでその後長い間、教官や院生がデータサービスに協力することになった。このような実績の積み重ねと、データの重要性を文部省担当者に度々説明して、やっと1997年に学部附属施設として認められ、他のデータセンター(文部省関係)も次々と認められて、やっと肩の荷がおりた想いがした。

もう一つの苦勞話は、ある時期頼まれて、学会誌の編集・印刷・発行を一手に引き受けたときのことである。まづ人手がないので、講座の職員に手伝ってもらったが、論文の原稿がなかなか集まらないことや、査読をお願いしても期限までに返してもらえないことや、学会の金が少ないので印刷代を値切ることなど、とても研究できる状況ではなかった。しかし誰か引き受ける人がなければ、学会誌の維持は難しい時代であった。

広く学会活動の話をすべきところ、私が関係したことに片寄ってしまい、原稿を依頼されました。國分征会長と会員各位にお詫びします。また、京大を定年で退官してから12年間、学会の総会・講演会に全欠席したことも申し訳なく、これからは時々でも出席しなければと反省しています。

国際学術交流事業補助金受領者の報告

●洪 崇勝 (Horng, Chorng-Chern)

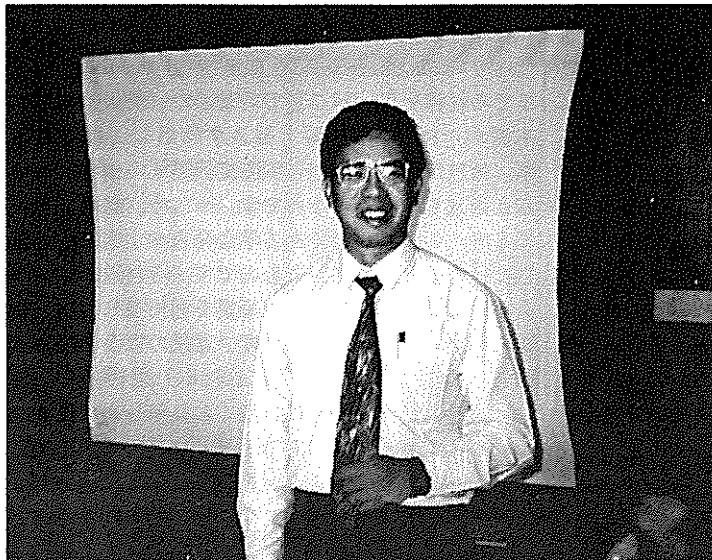
台湾中央研究院地球科学研究所

Institute of Earth Sciences, Academia Sinica

P.O. Box 1-55, Nankang, Taipei, Taiwan 11529 R.O.C.

Dear colleagues,

As a paleomagnetist from Taiwan, I am very glad to attend your 98th fall meeting of SGEPPS. It's a really good chance to know many new paleomagnetic friends



whose names were familiar to me before by reading their articles from international scientific journals. In spite of a very short staying in Japan and some language barriers between us, especially in the oral session as you

●藤田清士

神戸大学大学院自然科学研究科
環境科学 地球環境講座

今回、国際学術交流事業の補助を頂き、IUGG GENERAL ASSEMBLY BOULDER大会に参加させて頂きました神戸大学の藤田清士でございます。本会報では徒然なるままに、会議と旅の顛末を報告させていただきます。

United AirlineでLos Angeles空港に到着しましたのは昼前の大変暑い時刻でした。空港では突然、Denver行きの出発ゲートが変更になり出発が遅れたり、あまり有能でない地上職員にあたりさんざんでした。しかしながら、最終目的地のDenver空港は非常に機能的で且つ合理的で何一つ嫌な思いはしませ

know, I still got a very strong impression of your achievements in many aspects of paleomagnetism. Comparing your paleomagnetic faculty with that of western countries, it seems to be a relatively small group in Japan. However, your studies in tectonics, magnetostratigraphy, rock magnetism, paleointensity, secular variation, geomagnetic field transition and magnetic survey are constantly keeping the steps with advanced research in the world. Surprisingly, these achievements were mainly contributed from a very young and highly energetic paleomagnetic group.

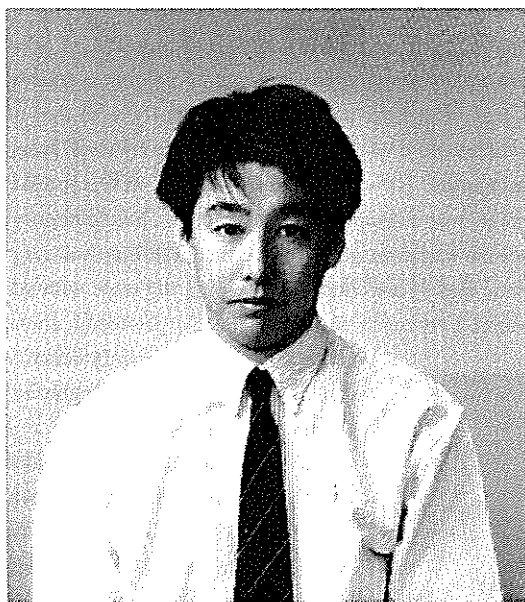
It is impossible to have such a nice journey without the financial supports from the SGEPPS. Basically, this supplies one of the best ways to exchange our experiences and ideas in research directly and to promote further scientific cooperation between Japan and other areas. But it takes a little longer waiting to get the final decision of the financial application, which may make some troubles for anxious applicants. I am happy to know that you are thinking to change the application rules in the near future.

Finally, I would like to express my great appreciation to Dr. Masayuki Torii at Kyoto University and many enthusiastic friends for their kind help and much encouragement to my joining this successful meeting.

んでした。

到着の翌日は日曜日でしたので、すぐに会場となるUniversity of Coloradoへ行きRegistrationを終え、木陰のベンチで昼食をとりながら発表原稿の手直しをしていました。学内は広大で緑は美しく、かの国にこんなに整備された大学はあるだろうかと思いをめぐらせました。

そして、いよいよ発表当日。私の参加したセッションは地球電磁気関連で、様々なモデリング手法で地球内部の電気伝導度構造を推定する研究者の集まる場所です。さすがに様々な国の人々が集うと発表のどこに重点を置くか、どこに研究の主張を与えるかの違いがわかりました。又、話し方、図の作り方も妙に国民性、人間性が現われていたのが面白



い点です。

私は昨年、学位論文にまとめた紀伊半島下の電気伝導度構造に解釈を与え発表しました。紀伊半島下の電気伝導度構造については地球電磁気/地球惑星圏学会の力武常次先生、笹井洋一先生、本蔵義守先生の御研究がありますので、先生方の論文を序論と

して引用させていただきました。発表がおわると、近年、紀伊半島の電気伝導度アナログモデルを作り地殻から上部マントルまでの構造を推定したDr. H.W. Dossoが私の所に来てくださり、多くの議論を楽しみました。Dr. Dossoはポスターで発表されており、この場においても紀伊半島の周りの海や断層構造をどのように電気伝導度モデルに組み込むかなどの議論で有意義な時間を過ごす事ができました。この後、時差と発表疲れのせいか、ポスター会場の椅子でビールを飲みながらまどろんでしまいました。こんな時間まで快適なのは、国際会議ならではないでしょうか？

帰りのSan Francisco行きの航空機内ではこの会議までの経緯を思い起こしていました。震災で倒れた本棚からIUGGの要旨を引きずり出し、郵送した事。地球電磁気学会から国際交流事業の補助を頂けると通知を受けた事などです。やはり、私の様な者でも唯一の喧れ舞台である学会発表や学術誌への投稿は研究者として胸躍るものです。それ故、多くの若手研究者が国際学術交流事業を利用される事をお薦めいたします。又、この度、渡航の機会を与えて下さった学会関係の方々にお礼申し上げます。特に、運営委員会の皆様には深くお礼申しあげ、駄文のしめくりとさせていただきます。

サイエンス・ボランティア募集について

文部省では平成7年度からサイエンス・ボランティア制度を実施することになり、「サイエンス・ボランティア登録名簿の作成および提供」業務を社団法人日本工学会に委託してまいりました。この制度は、青少年や社会人に科学技術について正しい知識と理解を深めて貰うために設けたものです。

日本には自然科学に関する博物館が約260あります。しかし、来館者に説明し、かつ正しい知識と理解を与える学芸員は、1館あたり0.3名しかおりません。また、都道府県の教育委員会等が主催する各種のイベントでも、科学技術に関する正しい表現等に欠けるものも見受けられます。

そこで、文部省では、教育機関(大学・高専・高校等)で長く青少年教育に携わった方、企業等で専門家として活躍された方、特殊な技術をもっている方々のご協力を得て、全国的にサイエンス・ボランティア活動を本年度から実施することにしました。この制度は人材派遣ではなく、サイエンス・ボランティアを必要とする機関に情報を提供する事業です。

それに従って、日本工学会では下記要綱でサイエンス・ボランティアを公募いたします。

記

1. 応募の期日： いつでも受付ます。ただし、本年度は初めてですので、一応の期限を平成7年10月末日とします。
2. 応募資格： とくにありませんが、ボランティアとして青少年・社会人に科学技術の面白さを、教えたり、一緒に楽しめる方
3. 応募申込み： ハガキに氏名・年齢・性別・連絡先住所・同電話番号を明記して、日本工学会まで登録用紙を請求して下さい。
4. 資格審査： 日本工学会内に設けた「サイエンス・ボランティア企画委員会」において資格審査を行い結果をお知らせします。
5. 登録用紙請求先および問い合わせ先：

〒107 東京都港区赤坂9-6-41 乃木坂ビル
社団法人日本工学会「サイエンス・ボランティア係」
☎03-3475-6421 FAX 03-3403-1738

期限を過ぎておりますが今年度に限らないようですので制度の広報として掲載いたしました。(会報担当)

本学会名誉会員である前田憲一先生（京都大学名誉教授・日本学士院会員）は平成7年10月14日逝去されました。享年86歳でありました。

前田先生は、昭和7年3月、京都帝国大学を御卒業後すぐ、電気試験所研究員として採用され、電離層観測の研究を手掛けられるとともに、電離層反射を考慮した、短波帯電波の伝搬特性を理論的に予測する研究などで優れた成果を挙げられました。昭和17年には電波物理研究所の研究官となられ、昭和21年、36才の若さで同研究所の所長となりました。昭和23年、機構が逓信省に変わり、電気通信研究所となってからは電波部長、基礎部長などを歴任され、昭和28年に母校から乞われて京都大学工学部教授とされました。

御停年までの20年間、京都大学にあっては、充実した教育と研究指導をおこなわれ、多数の優れた門下生を育てられました。また1961年、先生の御尽力により、学内に電離層研究施設が設置されました。京都大学ご退官後は京都産業大学教授となられ、同計算機研究所所長、同理学部長などの要職を務められました。学外では、東京大学宇宙航空研究所教授を併任されました。また学界にあっては、1963年から2年間日本地球電気磁気学会会長（当時委員長）を務められた他、電気通信学会会長、電気学会副会長、日本学術会議第9期会員なども歴任されました。

先生は戦後すぐ（昭和22年）、故長谷川万吉先生を中心に、故永田武先生、太田柁次郎先生らと共に本学会を創設されたことは、本学会会報138号（1993年1月20日）に太田先生が「本学会創設当初の思いで」として記しておられます。

1957-1958年のIGY（国際地球観測年）の機会に、前田先生は、日本の大学および研究所の研究者

に広く呼びかけ、ロケットによる超高層観測のプロジェクトを育てられ、自らも上空での爆発音の地上までの伝搬特性を測定して、上空の風や温度の分布を求めるロケット実験を手掛けられました。これらの超高層観測プロジェクトが、後に衛星観測へと発展しましたので、前田先生は、日本の宇宙開発の礎を築かれた方と言えます。またCOSPARの日本代表を長らく務められました。



昭和7年の大学御卒業後から始められた電離層に関する御研究を、その後のライフワークとして続けられ、多数の英文の論文を本学会誌JGGにも発表しておられますが、京都大学を停年ご退官後の23年間に、電離層ダイナミクスに関する理論的なお仕事を10篇の論文として発表されました。先生の最後の論文となりましたものは先生の83才の時のJGGに発表された論文（Vol.44, 909-917, 1992）であります。これらのライフワークとしてのご研究は、東レ科学技術賞、日本学士院賞、紫綬褒章、勲二等瑞宝章の御受賞（章）につながり、ま

た平成2年1月には日本学士院会員に選出されました。

前田先生はこのように、生涯を研究者として貫かれた方ではありますが、酒席ではユーモアのある会話を楽しまれ、テレビでは相撲番組をなによりも好まれるという人間味のある素晴らしい豊かな人生を送られました。

ここに先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

京都大学工学研究科教授 木村 磐根

メーリングリスト「GRAPE」のご案内

地磁気、古地磁気、岩石磁気グループでは京都大学大学院理学研究科の鳥居会員の提唱で日本語メーリングリスト「GRAPE」(Geomagnetism, Rock-magnetism And Paleomagnetism E-mailing list)を大阪府立大学総合科学部に設置しました。アドレスは grape@cias.osakafu-u.ac.jp です。現在のところトラフィックはまだあまり多くありませんが、先日の Ocean Drilling Program の掘削船 JOIDES Resolution 号の危機の情報が素早く流れるなど、特色あるメーリングリストになりつつあります。メーリングリストの目的等を記した呼びかけ文は

~~~~~

インターネットにアクセスできる環境の普及にともない、電子メールを利用しておたがいに興味のある研究者の間の、気楽な情報交換や連絡が可能になってきました。AGUのGPE-mail Networkなどがその例で、すでにかなりの方が利用されていると思います。印象に深いものでは、AGUのプログラム情報や、Lisa Tauxeが始めたwasp-waisted hysteresis curveについての議論などがあります。まあ、私たちもそれに近いことを「日本語」が通じる範囲でやってみようという訳です。

どんな利用法があるかと私が思いついたところでは

- \*協同研究の呼びかけや企画募集
- \*講演会やセミナーの案内
- \*ちょっとした実験技術に関するQuestion and Answer

やknow howの公開

- \*新製品などにかんする意見交換
- \*こんな文献ありませんか?というhelp依頼
- \*外国からの訪問者などの情報
- \*学会関係の、やや非公式な情報(いつも神戸大がアレンジするコンパなど)
- \*大学院入試などの情報
- \*移動、長期出張などの連絡
- \*上品なゴシップ(?)

などです。できるだけ気楽に、しかし、ある程度の節度は保って、というところではないでしょうか。

電子メールグループの名称は、渋谷さんと私であれこれ考えた末、GRAPE(Geomagnetism, Rock-magnetism, And Paleomagnetism E-mailing-list)ということにさせていただきました。ブドウのようにたわわな効果が得られるのか、それともすっぱいブドウになってしまうのかは、みなさん次第です。どうか存分にご活用ください。

記事の投稿は、grape@cias.osakafu-u.ac.jp にお願います。投稿された記事は自動的にメールグループに登録された全員に配信されます。他の電子メールグループからのおもしろそうな情報の転送も歓迎いたします。

\*\*\*\*\*  
この呼びかけは、鳥居@京大地惑が行っています。メーリングリストの管理は渋谷@大阪府大総合が行います。

登録などの連絡先: shibuya@cias.osakafu-u.ac.jp  
苦情などのあて先: torii@terra.kueps.kyoto-u.ac.jp

~~~~~  
となっています。

GRAPE は自動登録になっています。登録するには、grape@cias.osakafu-u.ac.jp にメールをお送りください。そのメール自身は配布されませんので内容は何でも構いません。すぐに登録されてメールの配布が始まります。また、次に grape に出したメールは他の参加者に配布されます。GRAPE は fml というメーリングリスト管理プログラムで運営されています。利用法は grape-ctl@cias.osakafu-u.ac.jp 宛に

help
という内容のメールを送ると送り返されてきます。なかなか多機能で過去のやり取りなども取り寄せられますので一度ヘルプファイルを取り寄せてみてください。

(渋谷秀敏会員より)

研究助成金案内

●山田科学振興財団 (1996年度)

〆切1996年3月31日

自然科学の基礎的研究に対して補助、実用指向研究は対象外。援助額は1件あたり200万から500万円、総額4,000万円、援助総件数は10件程度。学会からの推薦及び財団関係者からの個人推薦の中から選考。用途は給与以外は自由。使用機関は2年間。推薦枠2件以内。

連絡先

財団法人山田科学振興財団
〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号
06-757-3311 (代表)

推薦は総務までご相談ください。

SGEPSS Calendar

1995年

- 12月11日～15日 AGU Fall Meeting at San Francisco, USA
 12月19日～20日 CA研究会 於 地震研究所
 12月25日～26日 平成7年度 STE研 研究集会「スペースシミュレーション研究会」
 於 名古屋大学大型計算機センター

1996年

- 1月23日～27日 Solar-Terrestrial Predictions Workshop at Hitachi Civic Center
 2月12日～16日 AGU Chapman Conference on Magnetic Storms
 at Jet Propulsion Laboratory,
 3月26日～29日 地球惑星科学関連学会合同大会 於 大阪大学豊中学舎
 4月15日～19日 COSPAR Colloquim for Magnetospheric Research using Advanced Technique
 at Beijing, China
 5月13日～17日 International Conference on Substorms-3 at Versailles, France
 5月20日～24日 AGU Spring Meeting at Baltimore, USA
 7月14日～25日 COSPAR Scientific Assembly at Birmingham, UK
 7月23日～27日 WPGM (Western Pacific Geophysics Meeting)
 and SEDI (Study of the Earth's Deep Interior)
 at Brisbane Convention and Exhibition Centre Brisbane, Australia
 8月4日～14日 International Geological Congress at Beijing, China
 8月11日～15日 AGU Chapman Conference on Coronal Mass Ejection: Causes and Consequences
 at Bozeman, Montana, USA
 8月28日～9月5日 URSI General Assembly at Lille, France
 9月9日～11日 International Workshop on Planetary Radio Emissions V at Granz, Austria.
 11月 AGU Chapman Conference on Shallow Level Processes in Ocean Island Magnetism:
 Distinguishing Mantle and Crustal Signatures
 at Canary Islands
 12月15日～19日 AGU Fall Meeting at San Francisco, USA

SGEPSSカレンダーは会員からのお知らせで成り立っております。国内外の学会、研究会、委員会、予稿締切等、皆様に広めるべきことがございましたら会報担当までお知らせください。

地球電磁気・地球惑星圏学会

会長 國分 征 総務 湯元清文

〒442 豊川市穂ノ原3-13 名古屋大学太陽地球環境研究所 05338-9-5182 Fax 4-8806

庶務 渋谷秀敏(会報担当)・森岡 昭

〒593 堺市学園町1-1 大阪府立大学総合科学部地学教室

0722-52-1161 ex 3735 Fax 55-2981 e-mail shibuya@cias.osakafu-u.ac.jp

運営委員会 〒113東京都文京区本駒込5丁目16番9号学会センターC21(財)日本学会事務センター気付

03-5814-5810 会員業務(入退会、住所変更等、会費、会誌)

03-5814-5801 学会業務(庶務、窓口、渉外)

03-5814-5820 ファクシミリ

入会申し込み、国際学術交流事業への応募は運営委員会宛、研究助成金案内は総務宛、会報への投稿は担当庶務宛ご連絡ください。会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿をお待ちしています。

第99回総会並びに講演会開催のお知らせ(第7回地球惑星科学関連合同大会)

固有セッションについて

共通セッション・シンポジウムについては、連絡会ニュース参照。

第99回総会並びに講演会は第7回地球惑星科学関連合同学会として下記の通り開催されます。

○期間: 1996年3月26日(火)~29日(金)

○会場: 大阪大学豊中キャンパス

○SGEPSS固有セッション講演申込および予稿原稿送り先:

★地球内部および月・固体惑星関係

〒113 東京都文京区弥生1-1-1
東京大学地震研究所
笹井洋一宛

★太陽・惑星間空間、地球・惑星電磁気圏および地球・惑星大気関係

〒611 宇治市五ヶ庄
京都大学超高層電波研究センター
大村善治

○講演申込は1月8日(月)締め切りです。締め切り日以降に到着した申し込み、電話やFAXによる申し込み遅延依頼は、受け付けることができません。

○総会議題の申込は、2月末日迄に会長宛書面をお願いします。

○講演申込用紙及び予稿原稿フォーマットは、会報に同封されています連絡会ニュースに記載の統一フォーマットをコピーしてお使い下さい。尚、申込用紙には、必ず以下の固有セッションの小区分記号を記入して下さい。

- A 地球内部: 1. 主磁場ダイナモ 2. 電気伝導度 3. 地殻活動電磁気学 4. 磁気異常 5. 岩石磁気・古地磁気 6. 磁場計測 7. その他
- B 固体惑星: 1. 太陽系 2. 月・隕石 3. 比較惑星 4. その他
- C 太陽・惑星間空間: 1. 太陽・太陽大気 2. 太陽磁気圏構造 3. 惑星間空間擾乱 4. 宇宙線 5. 太陽風・磁気圏相互作用 6. その他
- D 地球・惑星電磁気圏: 1. 磁気圏構造 2. 電離圏構造 3. 磁気圏電離圏結合 4. オーロラダイナミクス 5. 磁気圏プラズマ波動 6. ULF波動 7. 惑星電磁気圏 8. その他
- E 地球・惑星大気圏: 1. 大気圏力学 2. 大気圏化学 3. 大気圏放射 4. 惑星大気 5. その他

○申込用紙、予稿原稿ともにコピーを同封して下さい。コピーを同封してないものは受け付けません。

○(a)講演申込用紙の氏名、所属はプログラム編集・印

刷の都合上、日本語表記が可能な場合は必ず日本語でお願い致します。(b)講演題目は、予稿と同じ言語でお願いします。(c)外国人の氏名はアルファベット表記でも差し支えありませんが、所属はできるだけ日本語で表示して下さい。(d)日本人著名者の場合は、漢字とアルファベットの両方の欄に記入されていること。(e)英語講演題目は、文頭、固有名詞、略号以外は小文字とすること。

○予稿原稿は、合同学会用の規定の枠(A4)にあうようにできるだけワープロを使用して下さい。印刷後のスペースはA5横相当/縮小率70%になりますので、原稿は大きめにお書き下さい。

○非会員のみによる講演申込は受け付けません。筆頭著者としての講演申込は原則として一人一件です。ただし発表分野が異なり、それぞれを口頭、ポスターに分けて行う場合に限り一人2件までの申込を受け付けます。

○口頭発表の時間は12分(講演10分、質疑2分)です。

○発表方法: ポスター発表・口頭発表の区分は御希望にできるだけ従いますが、プログラム構成の都合上、御希望の区分以外での発表をお願いすることがありますので、御協力下さるようお願い致します。

○緊急の話題のために、約5件のポスタースペースを確保するべく、合同学会連絡会に申し入れる予定です。発表者は3月15日までに関係のプログラム委員にお問い合わせ下さい。

○講演・ポスター発表の際にビデオ(VHS)、パソコンもしくは映写機(8mm)を使われる方は、その旨、プログラム申込用紙にご記入下さい。

○公開フォーラムは、1~2件が可能です。開催を希望される方は、希望日時、予定参加者数、集會名、代表者・所属、連絡先を明記して、1月8日迄にSGEPSSプログラム委員(京都大学超高層電波研究センター大村善治)に申し込んで下さい。予稿原稿フォーマットでフォーラムの内容の詳細をお送りくださいれば、SGEPSSの予稿集にも掲載します。なお、公開フォーラムの性格については会報第140号をご覧ください。

!! 予稿はA4横 !!

予稿フォーマット講演申込用紙
などは連絡会ニュース参照